

2021.5
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみ やく 富 薬

5号

第43巻
No.382



クスノキ *Cinnamomum camphora* Presl

(クスノキ科 *Lauraceae*)

生 薬 ショウノウ（樟脳）材を切削機で薄い木片に碎いて大釜に入れ、水蒸気蒸留し、ゆっくり冷却して結晶化させる。冷却器の中の水の表面に浮いた白い結晶を集め、乾燥する。

成 分 樟脳は *d*-camphor。その他の精油：*α*-pinene, camphene, phellandrene, cineole, dipentene, *α*-terpineol, safrole, o Eugenol, *d*-limonene 等。

効 能 衣服の防虫剤として用いる他、鎮痛、消炎、鎮痒薬としてかゆみ止めやリップクリーム、湿布薬などに配合され、外用される。複方サリチル酸メチル精（肩こり、筋肉痛、筋ちがいに配合される。

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



鎌倉時代の歌集『夫木和歌抄』(1310)に「和泉なるしのだの森の 楠の木 千枝にわかれて 物をこそ思へ」と歌われているように千々に分かれた枝に常緑の葉が青々と茂る様子を表したものです。春、芽吹く若葉が展開すると古い葉は落葉します。葉は革質、深緑色で表面は光沢があり、基部から少し上の所から3本の葉脈がはっきりと分かります。枝、葉、材共に芳香があり、樟脳の原料とされます。『絵本江戸風俗往来』(1905)には「蚊遣火…されば夏の夕暮、行水・夜食の折りは蚊遣を焚きて蚊を防ぐ。蚊遣は蚊遣香を始め、楠等を用いたり」と枝葉を集めて焚いたことが記されています。初夏に円錐花序を葉腋から出し、秋に黒紫色の球形の果実を

熟し、種子から蛾を採って蛾燭を作ったことが『本草綱目啓蒙』(1803)に見えます。

関東以西、済州島、中国南部、ベトナムなど暖地や亜熱帯に分布する常緑高木で、生長が早くしばしば大木になり各地で神木として崇められています。日本の巨木10選の内8本をクスノキが占め、1位は国の特別天然記念物に指定される鹿児島県始良市蒲生町の蒲生八幡神社境内にある「蒲生の大樟」で、幹周り24.2m、樹高30mにもなり、下部は直径4.5mの空洞になっています。初代領主の蒲生舜清が保安4年(1123)に八幡神社を設立した頃にはすでに神木とされていたことから、樹齢1500年ほどと推定されています。2位は静岡県熱海市の阿豆佐和気神社(栄宮神社)の大樟で、幹周り23.9m、樹高20mにもなり、樹齢約2000年と言われています。江戸時代の国語辞典『倭訓栞』(1777-1877)には「豆州熱海、来の宮の神木に囲十一抱半ある楠あり。幹のうろに三十六人居並ぶといへり」とあるのはこの樹を指しています。

李時珍(1518-1593)は「その木理に文章が多い。故に樟という」と「樟」の語源に触れています。材が黄褐色から紅褐色で交走木理が美しいことから、現在でも家具や仏壇、戸棚、彫刻、欄間、木魚などに用いられています。また大木になること、材が緻密で耐湿・耐久性に優れ、加工が容易なことから弥生時代から船の材として使われていたようです。弥生時代終末期(2C-3C)福岡県前原市の潤地頭給(遺跡から外洋航海や輸送用の準構造船が出土し、丸太をくりぬいた船底部三点のうち一点はクスノキ材が使用されていました。この地域は『魏志倭人伝』(3C頃)に記された伊都国と推定されており、外交・交易拠点として栄えた伊都国が高度な造船技術を持っていたことが伺えます。『日本書紀』(720)の「神代上 国生み」に「つぎに蛭児を生んだ。三年経っても足が立たなかった。だから天の磐楳樟船にのせて、風のまにまに放流した」と書かれている「楳樟」はクスノキと考えられています。

『本草和名』(918)に「楠材 和名久須乃岐」とあり、『倭名類聚抄』(931-937)には「楠 和名久須乃岐」と「楠」の字を充てていますが、『多識編』(1612)には「楠、久須乃岐、今案ずるに南蛮久須」と「樟、久須」の2種を分け、『大和本草』(1709)の「樟脳」の項では「樟と楠と一類二物也。国俗のクスノ木というものの二品あり。一品は香つよく、木心黒赤。樟脳を煎す。是樟なり。一品はイヌグスと云う。香少なし、木心色赤黒ならず。是楠なり」と、香りのあるクスノキ「樟」と香りが少ないイヌグス(タブノキ *Persea thunbergii*)「楠」に分けています。タブノキは青森県以南に自生するクスノキ科タブノキ属の常緑高木で、クスノキによく似ていますが、葉の葉脈が網状であり、クスノキほどの強い香りはなく、赤みを帯びた材をベニタブと呼び、建築、家具、枕木、彫刻、パルプ、白、薪炭に用います。古代クスノキと同じように丸木船の材としても用いました。

(村上守一 記)